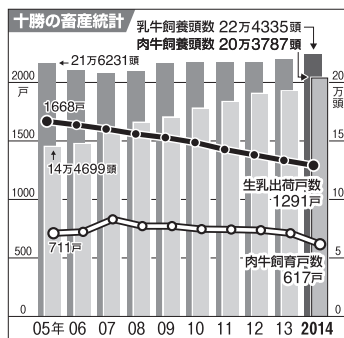




1～12月の生乳生産量は0.5%増の108.4万トン、経産牛1頭当たり乳量は0.6%減の8716キロと、いずれもほぼ前年並みだった。生乳出荷農家1戸当たりの平均生産量は3.8%増の839.5トンまで増えた。

■肉用牛 戸数は13%減 黒毛離農多く

肉用牛の飼育戸数は13.2% (94戸) 減の617戸と、高齢化による離農などで黒毛和種を中心に減った。黒毛和種の飼育戸数は5.6% (30戸) 減の504戸。飼育頭数では繁殖用雌牛が0.1% (16頭) 減の1万8049頭と前年並みを保ち、未經産牛が増えたことで合計頭数1.1% (431

ることがうかがえる。

酪農家の生乳出荷規模でも500トン以下が34戸減少したのに対し、901～1000トンが14戸、2001トン以上が2戸増加するなど大型化が鮮明に。1戸当たりの飼育頭数は155.8頭で、初めて150頭を超えた。

頭) 増の3万8264頭となっている。

ホルスタイン種 (肉用) の飼育戸数は、2戸増えて99戸、飼育頭数は5.8% (5769頭) 増の10万5340頭となった。交雑種 (F1) を含むその他肉用種は7戸増の121戸、11% (5862頭) 増の5万9290頭だった。頭数増は大型法人の規模拡大などが影響したとみられる。

■個体販売 繁殖農家減少 素牛が需要増

乳用牛の市場価格動向は育成牛が8.1%上回る27万円、初妊牛が5.9%上回る54.5万円、経産牛が15.1%上回る35.3万円と高値。肉用牛も素牛が、黒毛和種の雌が15.9%上回る50.9万円、去勢が12.6%上回る59.5万円、F1も雌が12%上回る30.7万円、去勢が12.5%上回る36.9万円。全国的に離農などで繁殖農家が減る中、十勝産の素牛の需要が高まっている。

■馬23戸、豚1戸減少

馬は飼育戸数が23戸減の170戸。豚の飼育戸数は1戸減の26戸、繁殖豚は17.8%増の6082頭、肥育子豚が1.3%増の4万716頭となった。

※文中の増減数は前年比

農業ガイド1026号

2015年9月19日

道内振興局別生産法人数 十勝が2位 18増の477に

道農政部は2015年1月現在の道内の農業生産法人数をまとめた。十勝は馬産地の日高 (478法人) に次いで、前年比18法人増の477法人となっている。日高の法人数が減少傾向なのに対して十勝では増えており、十勝は近年中に法人数で全道1位になるとみられる。

十勝、首位・日高と1差 逆転へ

農業経営の法人化は、経営管理能力や対外的な信用が高まるほか、給与や休日制度、社会保険の整備で人材が確保しやすくなるなどの利点がある。一方で社会保険の整備などによる費用負担もあり、法人化するかどうかの判断が分かれる。

全道は初の3000台

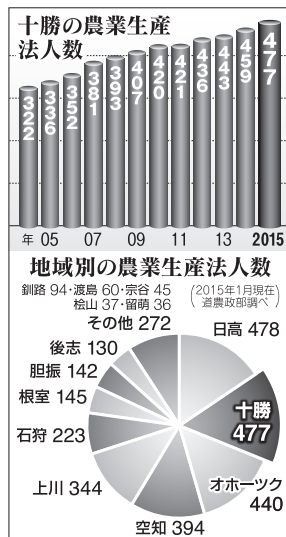
道内全体の法人数は、前年比117法人増の3045法人で、初めて3000法人を超えた。

地域別の法人数でトップの日高は前年比4法人減。競走馬 (軽種馬) の産地だが、徐々に法人数は減少傾向にある。

3位はオホーツク管内で同15法人増の440法人となっている。

過去5年間の振興局別の増減では、日高以外は増えている。最も増えたのがオホーツクの109法人で、次いで上川の68法人、空知の59法人、十勝の57法人となっている。

全道の組織形態別では、現在は新たに設立できない「特例有限会社」が最も多い63.7%を占め、次いで「株



式会社」が26.4%、「農事組合法人」が6.7%と続く。過去5年間で最も設立数が伸びているのは株式会社となっている。

農地の提供者や常時従業員以外の構成員のいる農業生産法人は全道で128法人。うち、継続的取引関係にある者などを構成員とする法人が同7法人増えて103法人となるなど、取引関係者の資本参加が増えている。

経営規模別では、30～99ヘクタールが1143法人、37.5%と最も多くを占める。

農業生産以外の関連事業に取り組む農業生産法人は、全道で607法人で19.9%。「農畜産物の加工製造」に取り組む法人が前年比26法人増の381法人で最も多くを占め、次いで「農畜産物の貯蔵・運搬・販売」に取り組む法人が、同39法人増の360法人と増加傾向にある。